

2023年3月27日

第6篇 労働賃金

第17章 労働力の価値または価格の労働賃金への転化

杉村政彦

○この17章では、必要労働と剰余労働とからなる労働日全体のうち、実体的には必要労働部分しか取り戻さないこと。さらに、日常的な意識からは労働の価値としての労働賃金とされ、労働日全体の価値が支払われているものと見なされること。それによって剰余労働の搾取関係が隠蔽されていることが説明されている。

○労働の価格としての労働賃金？

49頁3「ブルジョア社会の…」

㊦ブルジョア社会の表面においては、一見すると労働者の賃金は、労働の価格としてみられる。従って、一定量の労働に対して支払われる、一定量の貨幣として現れる。つまり、労働が売買される商品としてあらわれる。

○労働力商品について確認

49頁7「しかし、…」

㊦労働が価格を持つ商品ならば、その価格は他の商品同様、その価値によって決定される。商品の価値は、その商品を生産するために支出された労働の結晶物であり、その価値の大きさは、その中に含まれる労働の大きさによって測ることとなる。だとすれば、12時間労働の価格は、12時間労働によって規定されるということになり、同義反復になる。賃金は労働の価格であるということは、つまり労働は労働によって決定されるということであり全く同じことの繰り返しで何事の説明にもならない。

50頁8「商品として…」

㊦労働が商品として市場で売られるためには、売られる前に存在していなければならない。労働は売られる前に存在することはない。元々、労働は価値の実体ではあるが、価値を持ったものではない。労働は商品の中に対象化されて初めて価値となる。従って、労働は価値を持つものではなく、労働が商品として売られることはない。労働者が労働に独立の存在を与えるとすれば労働者は労働力商品売るのであって、労働を売るのではない。

51頁1「第1に、…。あるいは、別の場合には、…」

㊦「第1は」等価交換を前提として、原材料費や機械等の工場設備の償却費用とその生産に必要な労働の総計で確定され、今回の労働により生み出された価値が等価の

6 シリングを労働者が受け取るならどうなるか。

その場合、利潤のない生産は行われず、資本家は資本を投下しないこととなる。労働者はその労働の買い手たる資本家のために剰余価値を生み出さず、資本に転化されず、資本主義的生産の基礎が消滅、土台がなくなることを意味する。

「別の場合には、…」不等価交換を前提。12 時間の労働と引き換えに 6 シリングより少なく受け取る。12 時間労働が 10 時間、6 時間の労働と交換される。これは価値規定を否定したものになり原則成立しない。

52 頁 11 「商品市場で…」～53 頁

☞労働力が商品化した市場で直接資本家に相対するのは労働ではなく、労働者である。労働者が売るのは、その労働力である。

☞労働力の使用過程が労働であって、労働が実際に始まる否や、それはすでに労働者のものでなくなり、従って彼によって売られることはできない。

☞労働は価値の内在的尺度であるが、それ自体は何ら価値を持たない。労働の価値とは実は、労働力の価値のことである。つまり労働者は労働力を商品として売るのであり、賃金は労働力の価格なのである。（49 頁に回答を与えていることになる。）

☞なお、労働の価格という表現は、価値概念が全く消し去れているだけでなく、誤った意見で、搾取関係を隠蔽する以外のなにものでもない。

54 頁～55 頁

☞古典派経済学は、価値をつくるということ（労働）と、価値をもつということ（労働力）とは、まったくの別の事柄であることを明確に認識できなかった。

55 頁最後～57 頁「つぎに労働力の価値が、労働賃金というその転化形態において如何に表示されるかを見よう」

☞労働日が 12 時間、労働力の 1 日の価値が 3 シリングで 6 労働時間をもって現わされると仮定。

この場合、労働力の日価値が 1 日の労働の価値として表現されるならば、12 時間の労働は 3 シリングの価値をもつ。言い換えると、労働日の支払い部分 6 時間の労働が表示される 3 シリングの価値は、6 時間の不払い労働を含む 12 時間の総労働時間（1 労働日）の価値として現れる。

従って、労働賃金という形態は、労働日が必要労働と剰余労働とに、支払い労働と不払い労働とに分かれていることの痕跡を全く消し去ってしまう。よって、全労働（1 労働日）が支払い労働として現れる。（見えてしまう。）

○労働賃金の形態に転化させことで…

58 頁 3 「かくして…」

☞かくして（このようにして）労働力の価格を労働の価格のように見せ、先の労働賃金の形態に転化させることの決定的な重要性が理解される。それは労働者と資本家の法律的観念、資本主義的生産様式のすべての欺瞞、そのあらゆる自由の幻想、ブルジョア経済学の弁護論的空論の基礎となっていることを理解させる。

○ではなぜ、賃金は労働力の価格として現れないで、労働の価格だという見え方になるのか、その諸事情は、

☞資本と労働との間の交換は、すべての他の商品の売買と全く同じように見えるから。買い手は一定額の貨幣を与え、売り手は一商品を与えるという関係をそのまま賃金関係に移しかえていることがあげられる。

☞賃金は、労働者が労働したから（その後）、その労働に対して支払われるように見えるから。

60 頁 8 「そのうえに、労働賃金の現実の運動が示す諸現象は、…」

☞賃金が労働力の価値として支払われるのではなく、労働の価値として支払われている現象を呈している。

「第 1 に、労働日の長さの変動…」

☞労働時間数の変動による賃金収入の増減があげられる。半日しか仕事していないから、賃金が半分に減額されるのは端的な例。労働の長短により賃金が増減することから労働の大小により賃金が決まるように見える。

もっと言えば、時間＝貨幣が徹底している。生活に必要な財やサービスが、ほとんど商品化され貨幣と交換でなければ手に入らない商品経済のもとでは時間は貨幣に等しくなる。最低賃金時間額 920 円の非正規労働。23 年目標に最低賃金 1,000 円（全国加重平均、政労使会議で岸田首相）のように、労働者は自分の労働する能力を時間決めで売っている。（第 18 章 時間賃金）

「第 2 に、同じ機能を行う異なる労働者の労働賃金における個人的差異。」

☞同じ労働に従事しても、個人差（第 19 章 出来高賃金）により賃金に差が生じることで、賃金は労働の価格であるという見方を助長している。